

## 日系アメリカ文学——強制収容所内の文学活動③

### ハートマウンテン収容所——

篠田 左多江

(平成4年10月1日受理)

## Japanese American Literature: the Literary Movement in the Heart Mountain Relocation Center

Sataye SHINODA

(Received October 1, 1992)

### 1. はじめに

日系三世の映画監督スティーヴン・オカザキは、その作品「待ちのぞむ日々」(Days of Waiting)によって、1991年度ドキュメンタリー部門のアカデミー賞を受賞した。日系人監督として初めての受賞であった。これは一世アーサー・イシゴの白人の妻エステル(Estelle)<sup>(1)</sup>が、ハートマウンテン収容所のなかで書きためたたくさんのスケッチに短文を添えた画文集*Lone Heart Mountain*をもとにしたドキュメンタリー作品である。彼女は日系人の強制立ち退きの際に夫と別れて暮らすことはできないとして、夫とともに収容所へはいった。そしてWRAの許可を得てレポート担当となり、収容所のなかで自由に写生をすることが許された。彼女はポモナ仮収容所を含む3年4ヵ月におよぶ収容所生活を克明に記録した。それは、合衆国政府の違憲、人権無視の強制収容を声高く告発するのではなく、人びとの日常を淡々と描いた絵と文であるからこそよけいに読む人の心を打つ。オカザキはエステルを効果的に使い、日系人の歴史も織りまぜながら強制収容の実態を映像化した。アメリカ社会の少数派人種である日系人の監督が、アメリカの標榜する民主主義にもっとも反する強制収容を描いた作品でアカデミー賞を得る日が来るなどと、当時誰が想像しただろうか。合衆国政府が被収容者のすべてに謝罪して2万ドルの賠償金を支払った時点で、それがはじめて可能になったのではないだろうか。

収容所内で日系人がおこなった文学活動を調査してきた筆者は、すでにボストン収容所<sup>(2)</sup>、トゥーリレイク隔離収容所の活動<sup>(3)</sup>について報告した。この小論では

ハートマウンテン収容所における文学活動を明らかにしたい。

### 2. ハートマウンテン収容所の生活

ハートマウンテン収容所に最初の立ち退き者が到着したのは1942年8月12日、ポモナ仮収容所からの任意先発隊199名であった。この後、カリフォルニア州ポモナから5,260名、サンタ・アニタから4,603名、オレゴン州ポートランドから986名が到着、10月21日にはほぼ移動が完了して住民は10,890名となった。収容者は汽車で送られた。エステル・イシゴはその時の様子を次のように語っている。

After a four sleepless nights in the old fashioned train with its gas lights and wood stove we came to a stop in the midst of desert-like plateaus. In the distance rows of barracks stood in cactus covered sand, on ancient, weirdly jagged waste land that spread far into the wide horizon. There lay the camp at the foot of a lonely mountain<sup>(4)</sup>.

収容者を移送する汽車はすでに使われなくなって久しい骨董品ともいえるもので、電燈ではなくガス燈がついていた。到着した人びとがまず印象づけられたのは、黒いタール紙で覆われた収容所のバラックの列とその上に高く聳えるハート山の姿であったという。収容所はワイオミング州コーディ(Cody)とパウエル(Powell)の町の間中に位置した。面積は全収容所中第3位の45,000エーカー、収容人員は1万である。他の収容所と



写真1 ハートマウンテン収容所（1944年）  
Mr.Sataro Tonai提供

同様に砂漠地帯にあって気候の悪さも同様であったが、ここは全収容所中もっとも寒暖の差が激しく、最高気温は華氏100度、最低は華氏マイナス40度であった。雪は早ければ9月半から降り始め、時には5月まで続くこともあった。気候条件に関してはすべての収容所の中で最悪であるといえよう。

所内は30ブロックに分れており、1ブロックごとに24棟のバラックがあって、それに別棟の食堂および洗濯場兼手洗いがついていて、1ブロックには約600名が居住可能であったが、部屋の中には水道も手洗いもなかったため、人びとは必要とあれば極寒の夜でも別棟まで行かねばならなかった。手洗いにはバスタブが8、シャワーが12あったが、男子用のバスタブはなかった。そこで男たちは所内の建設用材置場から持ってきた板を使って、シャワーの蛇口の下に日本式の四角の風呂桶を作り、身体を温めて寒さをしのいだという。

所長は長年合衆国森林局に勤務した経歴をもつ62歳のC.E.ラッチフォード（C.E.Rachford）であったが、半年で引退し1943年からガイ・ロバートソン（Guy Robertson）に代った。彼は52歳、カリフォルニア大学ロサンゼルス校に学ぶ娘を通じて二世の学生たちを知っていたため、日系人に特別な理解を示したと言われる。この収容所も他と同様、それぞれのブロックから合衆国市民と非市民の名1名づつの代表が住民投票で選ばれ、住民の自治組織が作られて、WRA当局と協力して運営にあたった。

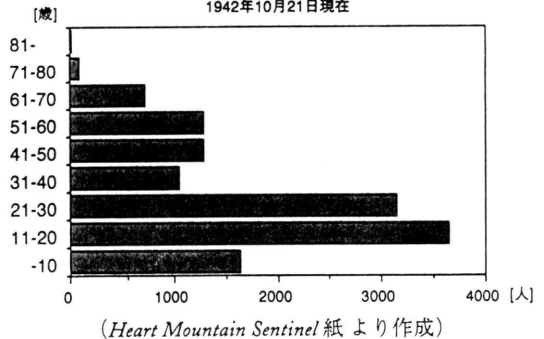
WRAは住民の不満を和らげ、不穏な動きを抑えて人びとのエネルギーを発散させるために娯楽や夜学での学習を奨励した。一世や帰米二世のための英語の授業、逆に二世のための日本語教室、その他簿記、速記、裁縫な

どの職業訓練を行う夜学に、1,100名もの成人が登録していた。また、趣味の集りは音楽、演劇、スポーツの分野でありとあらゆる種類があった。日本舞踊はもちろん義太夫や筑前琵琶などきわめて特殊な日本の伝統芸能の同好会さえも組織された。

新聞創刊当時の調査によれば住民は、合衆国生れが6,902名、日本生れが3,970名で3分の2が合衆国市民であった。年令別人口をみると（図参照）、11から20歳がもっとも多く、ついで21から30歳となっており、圧倒的に若者が多い。立ち退き前の職業についてみると農業家が第1、次いで農場労働者、家庭労働者、果菜卸小売業、庭師となっている<sup>(5)</sup>。これは立ち退き前のカリフォルニア州の日系社会全般の職業分布とほぼ一致している<sup>(6)</sup>。

ハートマウンテン収容所の年令別人口

1942年10月21日現在



収容所内では他と同様に農園が作られて、食糧の自給自足をめざした。農業経験者の多い住民の努力によって、周囲の荒れ地はまたたく間に農地になり、灌漑水路が作られてさまざまな作物が実った。1943年には、漬け物用に白菜などの葉菜類や赤かぶが初めて収穫されたと記録されている。農地は26,000エーカーあり、トゥーリレイクに次いで2番目の規模であった。しかし、天候の悪さは農業に悪影響を及ぼした。例えば1943年10月に雪によって作物に被害が出たり、1944年6月には雹をとまう嵐によって、せっかく植付けたきゅうり、なす、トマトなどの夏野菜が全滅ということもあった。このときの雹は小豆大から野球ボールくらいもあり、嵐が去ったあと、所内の1部は水びたしの洪水になったという。当時の住民の話によれば、冬の雪、春の雪解け、夏の雷雨と収容所の中にぬかるみができることが多く、長靴が必需品だったとのことである。

冬の食糧として大量の野菜類を貯蔵するため、地下に

大規模な貯蔵庫が建設された。新鮮な野菜が少なかった初年度は、もやしを作って野菜不足を切り抜けたが、翌年からは農園と貯蔵庫のお蔭で冬でも野菜が欠乏することはなかった。合衆国内では「戦時中なのにジャップはたらふく食べている」<sup>(7)</sup> などの中傷が新聞や雑誌に掲載されて、日系人に対する外部の人びとの怒りを煽った。しかしその食糧は、収容者が努力して不毛の砂漠を実り多い農地に変え、さらに養鶏や養豚まで手がけた結果得られたものであった。

1943年に実施された忠誠登録の結果、不忠誠で日本送還を希望した者は全員、この年の秋までにトゥーリレイク隔離収容所へ送られ、それ以降のハートマウンテン収容所は、合衆国に忠誠な人びとの収容所となった。若者たちは、初めのうちは志願兵、のちには徴兵制度によって兵士として戦場に赴いた。1943年5月には入隊する二世のための初の壮行会が開かれる予定であったが、若者たちの苛酷な運命を暗示するかのようになり、その日は季節はずれの猛吹雪となって会は中止された。1944年7月に初めて収容所から出征した者の戦死の報が届いた。以後、戦死者が出る度に所内で追悼式が行なわれ、多くの所民が参列した。

この収容所は比較的平穏で、住民と監理当局との対立や激しい暴力事件などはほとんど起こらなかった。忠誠な人びとは外部へ働きに出ることを許可され、多くの男女が他の州の農園労働に従事した。たとえば妻子とともに収容されていた服部尚之（はっとり・たかひろ）は、外部へ出るための資金を得ようとモンタナ州、ワシントン州、ユタ州などへ働きに行き、収容所内よりも外部で暮した時間の方が多かったという。彼は時給66セントで鉄道工夫として働いた。それは、ソ連向けの軍需物資を積んだ貨車を動かすための保線の仕事で、戦争遂行の努力への貢献でもあった。

外部への再定住が許可されると、独身の若者たちが真っ先に出た。したがって就労のため一時出所する者、入隊する者、再定住する者などで、人びとの流動が激しかったようである。収容所は終戦の年の11月に閉鎖された。

### 3. 新聞『ハートマウンテン・センチネル』

WRAは転住計画の手引書のなかで“WRA encourages the evacuee residents to assume the fullest possible responsibility for publishing a newspaper that meets community needs.”と述べて新聞

発行を奨励している。そして“Like all other newspapers in the U.S., relocation center papers will enjoy full freedom of editorial expression.”<sup>(8)</sup> として報道の自由を保証しているかのようであるが、新聞の内容はpublic peaceとcommunity securityに役立つものであるべきと規定した。そしてWRAが記事の内容を検閲することおよびWRAの伝達事項を掲載することの2点を条件として発行が許可された。許可がおりると、作業のための部屋を与えられ、1収容所ごとに1紙に限り、従事者にはWRAの基準で給料が支払われた。したがって実際には報道の自由などなく、WRAへの批判を記事にすることは許されなかったといえる。ハートマウンテン収容所では、最初の立ち退き者が到着して以来約2ヵ月後の1942年10月24日、『ハートマウンテン・センチネル』の創刊をみた。これはビル・ホソカワを編集長とする住民組織により、火、木、土曜日の週3回発行された。大部分の収容所新聞が謄写版刷りであったのに比べ、これは活版印刷による本格的な新聞であった。はじめは4,000部発行されたが、翌1943年には6,000部となり、そのうち半分の3,000部は外部の読者へ発送された。記録によれば、所民から個人的に1,500部、WRAから公式に1,500部が発送された。都市別ではおもにロサンゼルス、デンヴァー、シカゴなどへ送られた<sup>(9)</sup>。ハワイ、カナダのほか合衆国内の8州に読者が存在した。日系人はじめエスニックをテーマとした作品を多く書いた作家ルイス・アダミック（Louis Adamic）<sup>(10)</sup> もその読者のひとりであったという記録がある<sup>(11)</sup>。

編集長のホソカワは、シアトル生れの二世で、ワシントン州立大学でジャーナリズムを学び、立ち退き前にすでに専門のジャーナリストとして活動していた。彼は創刊号の論説のなかで“Since the earliest days of this nation a free and watchful press has been the people's strength in time of crisis. Such a press has become an American tradition.”と述べて、『ハートマウンテン・センチネル』もこの伝統に従うものであるとした。そして“… not normal times nor is this an ordinary community. There is confusion, doubt and fear mingled together with hope and courage as this community goes about the task of rebuilding many dear things that were crumbled as if by a giant hand”<sup>(12)</sup> であると認め、人びとが不安を克服し

て希望をもって収容所生活を送り、以前の生活を再建してゆくための役割を果たすことが、新聞発行の目的であるとしている。ホソカワは新聞の基礎をかため、運営も軌道に乗った1年後の10月13日、アイオワ州の*Des Moines Register*紙に就職し、家族とともに収容所を去った。しかしその後も記事を送り続けた。彼は新聞の創刊時代に手腕を発揮し、基礎を作り上げた中心人物である。

この収容所では英文の雑誌は発行されなかったが、それをわずかに補うかのように、ときおり新聞に英文の詩が掲載された。とくに1944年8月12日付の収容所2周年特集号には、エステル・イシゴの挿絵とともに5篇の英詩が載っている。いづれも若い二世の作品らしく、家族と離れ、ひとりで収容所を去って行く感傷と新たな生活への喜びと期待などを表現している。

この新聞には『ハートマウンテン・センチネル』と題する日本語版があった。これには英語版とは別に一世が中心となって編集を行っていた。英語版の記事の翻訳のほか、独自の企画による記事も掲載された。一世および婦米二世が興味を持つと思われる趣味の会の案内もあった。新年には必ず短詩形文学の作品募集があって、選ばれた短歌、俳句、川柳が元旦の新聞に載せられた。1944年7月からは「ハートマウンテン歌壇」という欄が設けられ、高柳沙水（たかやなぎ・しずい）<sup>(4)</sup>によって選ばれた短歌が掲載された。日本語版は英語版の抜粋翻訳で、伝達事項を英語の読めない人びとに理解させることをのみを目的とした付属物という感じではなく、独立した新聞となっているのが特徴である。それはこの収容所では一世、婦米二世の集団がWRA当局と敵対するような事件が起こらず、他の収容所と比較して平穏だったためであろう。

この新聞は終戦直前の1945年8月4日から*Heart Mountain Bulletin*と変った。多様な記事で住民を楽しませた時期は終わり、ふたたびWRA通達を伝える役目に徹することとなった。この頃はすでに収容所の閉鎖が迫っており、8月25日には所内の人口は4,977名、大部分が高齢者と幼児をもつ家族になっていた。8月15日を過ぎても日本敗戦は報じられていない。9月8日になって日本語版に、原爆が投下された長崎の爆心地に草が芽生えたこと、被爆者が死にいたる経過についての記事が掲載されているのが唐突に思われる。このあとはすべて出所のための情報のみになり、新聞は11月2日に終刊と

なった。

#### 4. 『ハートマウンテン文芸』と『北米短歌』

ハートマウンテン収容所では短詩形文学が盛んであった。人びとの生活がある程度の落ちつきを取り戻した1942年暮れまでに黒川剣突<sup>(4)</sup>を中心とする「ハート山川柳吟社」、高柳沙水の主宰する「心嶺短歌会」、藤岡無隠・細江夫妻による俳句の「ハート山吟社」が結成された。それぞれ一世および婦米二世の多くの会員を有し、順番に会員の家を会場として毎週会合を開くという熱のいれようであった。

1943年中、それらの作品は『ハートマウンテン・センチネル』に発表されていたが、新年になって総合雑誌『ハートマウンテン文芸』が創刊された。編集の中心となったのは、婦米二世の岩室吉秋、一世の大久保忠栄であった。大久保は戦前はサンフランシスコの『日米』紙で文芸評論を担当しており、文学に造詣が深かった。また、発刊に大きな影響を及ぼしたのは、高柳沙水である。彼は収容前から歌人として知られた存在で、つねにハートマウンテン収容所の文芸活動の中心となっていた。表紙の絵および挿絵はエステル・イシゴが担当した。『ハートマウンテン・センチネル』紙日本語編集部の謄写版を使って印刷し、費用はWRAのコミュニティ活動費を使った。さらにこれを食堂や売店で一冊15セントで販売し、その売上金を積み立てて次回の費用とする計画であった。創刊号に関する会計報告によれば、寄付を含む売上げが90ドル15セント、支出は68ドル34セントで、繰越し金は23ドル81セントというつつましいものであった。しかし独立採算方式で何とか運営していける見通しはたった。創刊号は、収容所の砂嵐を描いたイシゴの絵を表紙とした43ページの小冊子であった。600部ほど作られたが、日本語に飢えている人びとの人気を集め、さっそく売り切れて増版になったという<sup>(4)</sup>。

「発刊の辞」と題する文には、「我々は現在の如き環境にあるからと云って、何等精神的に畏縮し、真理と美を求む心の自由まで失ふ必要はない。我々は假死的状態から脱して新時代に対処する強健なる精神と遠大なる英気を養ひ、智氣を広く百般に求めたいものである」と書かれている。この文から収容所生活が次の時代へのエネルギーを蓄えるための期間と考えられていることがわかる。人びとは収容所のなかで、無為な時間を過していると考えるのは耐えられなかったであろう。大切な時間を

無駄にしたい。何か有意義な活動をしたいという気持ちが、彼らを文芸誌の発行に駆り立てたことは想像に難くない。

内容は、禅僧・千崎如幻（せんざき・によげん）の仏教哲学とプラグマティズムとの関係を論じた小論、収容所の日常生活の1コマを描いた随筆2編、日本の思い出が1編あるほかはすべて短詩形文学の作品と作歌の技法講座である。高柳沙水が創作の中心となったためもあり、この雑誌は第1に短詩形文学の発表の場を提供すること、第2により高度な作品を作るよう人びとを指導することを目的とした。「発刊随想」のなかで太田敏夫は、「大体に詩とか歌といふものは繁華な都会生活より寧ろ冥想、思索に相應しい田園とか山野の生活から生れる様に思ふ、此意味からいふとセンターは都を遠く離れた曠原の涯で壮麗幽厳なハート山を背景に四季を通じて、清朗な大気に恵まれた自然境である。此處に優秀な文藝作品が生れるであろう事は大いに期待出来る様な気がする」と述べている。すなわちハートマウンテン収容所の周囲の自然を題材とする創作活動を期待している。

『ハートマウンテン文芸』は毎月発行の予定であった。しかし戦争中のことゆえ用紙の入手が難かしい、謄写版の執筆担当者がいないなどいろいろな障害があり、発行は困難をきわめたと思われる。2月13日に2月号、3月11日に3月号と順調に発行されたが、編集責任者のひとり、岩室吉秋が収容所を去ることになり、4月号から編集担当は大久保忠栄のみになってしまった。彼は短詩形文学ばかりでなく随筆にも力を入れて、4月号は随筆特集となり、以後は随筆も多く掲載されるようになった。4、5月号には、「日本最初の英語の先生」と題してラナルド・マクドナルド（Ranald MacDonald）<sup>(7)</sup>の短い伝記や短歌、俳句をおりまぜて風俗史を語る「端午の節句」などの啓蒙的な記事も載っている。また、「ハート山の野草」では周囲に咲く野の花を注意深く観察してそれぞれの特徴や魅力を解説しており、いかなる荒れ果てた砂漠の地にあっても人びとが自然を愛する心を持ち続けたかを示している。この頃から収容所を出てイリノイ州やユタ州へ行った人びとの通信が掲載されるようになった。「戦時風景とところどころ」ではシカゴの町の様子がユーモアを交えて描かれている。

この年7月に『北米短歌』が発行されたので、9月号の短歌の作品は少なくなっている反面、随筆および短編小説が現われた。『ハートマウンテン文芸』は他の収容

所の総合誌と比べて、これまで小説類がほとんど載っていないことが特徴であった。創刊以来9ヵ月たって、ようやく短編を書ける人材が育ってきたのであろう。前田静江の短編「星への便り」は、夫を戦場へ送った若い妻から夫への手紙の形式で書かれている。妻は幼い娘を育てながらひたすら夫の無事を祈って待つ。戦争時にみられる普遍的なテーマを扱い、文も稚拙であるが、それがかえって読む人の共感を呼ぶ。

同じ9月号で吉川國雄の短編「残った者」は、収容所で一世と二世の親子が直面した家庭内の問題を扱っている。ここに描かれているのは、婦米二世の兄、純二世の弟の対立と母親をめぐる葛藤である。一般のアメリカ人となんら変りのない生活をしてきた弟は、家族とともにすばやく収容所から外部への転住を果す。一方、日本語を使って暮らしてきた兄弟夫婦と未亡人の母親は、馴れぬ東部へ出て暮らす自信がない。兄にとって弟は抜け目のない合理主義者であり、弟の目に兄は英語もできず、アメリカ人としての失格者に映る。その上、兄弟のいずれが母親を引取るかという問題が起き、兄の妻は姑と一緒に暮らすことをためらう。しかし母親は弟の所でアメリカ風な暮らしをすることを望んでいない。当時、このような問題を抱える日系人の家族は多かったにちがいない。一世と二世、婦米二世と純二世、両者の間には言葉の違いからくるコミュニケーションの断絶があり、それから派生する諸問題は多くの家庭の深刻な悩みであった。短編はすべて日常生活に題材を求めている。

これからは短編を書く人も増えるかと期待された矢先、編集者の大久保が外部へ出たため、『ハートマウンテン文芸』は9月号で終わった。大久保自身は誰かが継承して発行することを期待していたようで、9月号には終刊を意味する言葉は見当たらない。しかし再び発行されることはなく、『ハートマウンテン文芸』は7冊を出して幕を閉じた。

一方、『北米短歌』は1944年7月に発刊された。『ハートマウンテン文芸』の編集者が東部へ出所して6月号が発行されず、8月2日になってやっと7月号が発行されるという事態におちいていた。このため危機感をもった短歌会の人びとが自分たちの発表の場を確保するために『北米短歌』を創刊したと思われる。これは高柳沙水率いる「心嶺短歌会」の機関誌で、所内のポスター印刷部で色刷りの表紙を作り、当時唯一の日本語新聞であった『ロッキーマウンテン新報』社に外注して写真をいれるなど、本

格的な雑誌の体裁をもっていた。収容所内の101名の作品のほか、短歌を作るための基本文法講座、万葉集以来の日本の著名な歌人の作品観賞などが掲載されて、高柳が情熱を傾けて執筆と編集にあたっている。しかしこの年7月にはハートマウンテン収容所出身の日系兵士のなかから初の戦死者が出て、収容所に重苦しい雰囲気が流れた。またジェローム収容所閉鎖により居残っていた500名が移動して来たり、収容者の東部への出所が相次いで、所内は落ちつかない状態になっていた。

『北米短歌』を毎月発行したいという同人の熱意にもかかわらず、次の10月号が出たのは11月になってからであった。この号にはハートマウンテンだけでなく、マンザナー、ポストンなど他の収容所の人びとの作品も掲載され、歌の総数は200首におよんでいる。高柳は10号の「消息」と題する文のなかで、「最近ややセンター生活や時局を背景とした作が見え初めたが、各センターの一般作品に、今少し我々の特殊の境遇や大きな時の動きに取材した歌を見たいと念願してゐる。時には、さういふものも見えるやうではあるが、将来、時と所とを異にした場合、1首の歌としての独立性を持ち、どれ程の作品価値をもつかといふことが疑問と思われる」<sup>(18)</sup>と述べている。

#### 戦時遠流の我等に歌の一つあれ後世史家の心打つ歌

高柳の詠んだこの歌に表されているように、彼は収容された者の心情を記録として残しておきたかった。彼は戦後にこれらの作品を集めて歌集を出版する計画をもっており、つねに「将来」に目を向けていた。そして収容所の経験を作歌のためのまたとない機会と考えて、技術の向上を図ろうとつとめた。しかし以後、『北米短歌』が発行されることはなかった。同人は発表の場を日本語新聞の「ハートマウンテン歌壇」に求め、それは終戦の1945年5月まで続いた。

#### 5. 短歌にうたわれた心と風物

以上述べてきたようにハートマウンテン収容所の文学活動は、多くの短歌に特徴づけられる。その豊富な作品は人びとの心や収容所生活の実態を探るもっとも適切な材料である。日本人は元来、長文よりも短詩形文学の短いことばのなかに感情を移入することを得意としてきた。選者の高柳は歌がきれいごとにと終わっている、もっと赤

裸々な感情を表現せよと述べて、会員の歌にはまだ満足していないようであった。しかしこれらの短歌は、WRAの報告には表われなかった人びとの心の軌跡であるといえる。人びとは何を見て何を思ったのか、テーマ別にいくつかの歌を選んでみることにする。

#### ○1943年元旦

黎明の日の早かれと祈りつつ  
配所の初日をおろがみまつる 福田あやめ

移されてあはれはるる来しものか  
雪の曠野に見る初日の出 高柳 沙水

#### ○1944年元旦

来るべき平和の日まで耐へ耐へて侘びしき  
暮らし貫き遂げむ 棚橋 宗二<sup>(19)</sup>

#### ○1945年元旦

我等いや堪へ忍ばなむ大ひなる  
試練の春を四たび迎へて 富田ゆかり

1943年1月、日本語新聞に短歌の作品が初めて掲載された。いづれも鉄条網のなか、白銀の世界で初めて迎える新年の感慨がうたわれている。この年には早く戦争が終わってほしいという希望がうかがえるが、その後の新年の作品には「耐える」ということばが使われて、次第に希望が持たなくなり、ひたすら耐えている姿勢がみられる。

#### ○ハートマウンテンの冬

ハートマウンテンの海拔五千尺に来る冬を  
自が身いたはり耐へゆかんとす 内田 静

ワイオミンの地にあるものはことごとく  
白ひと色の冬の寂しさ 内田 静

収容所の冬は長く、9月の初雪に始まり4月の雪融けまであたりは白一色に閉ざされる。暖かい南カリフォル

ニアから送られた人びとには辛い寒さであった。とくに老一世の身には耐えがたいものであったにちがいない。

# ○強制収容

囲はれて心萎えむとする我を  
神のみ力常にむちうつ

森岡 松緒

収容所にはりめぐらされた鉄条網と銃をもった監視の兵士の存在は、立ち退き者にとって衝撃であった。人びとは囚人扱いに抗議して、入所した年の11月21日、柵の撤去を求める3,000の署名をWRAに提出したが、希望はいれられなかった。このような絶望的な状況のなかで、信仰によってみずからを励まししながら生きる一世の気持ちがうたわれている。

# ○生活

鐵柵の中に明暮たつ噂  
尾に鰭つけて傳はる迅し

高柳 沙水

過密な状態で多くの人が暮らさねばならない収容所内ではつねに流言蜚語がとびかい、人びとはこれに悩まされた。

かずかずを學ばむ望み多くして  
キャンプの生活いとまもあらず

豊留 たか

日すがらを化石あさりて道も無き  
石原いそぐ足はかどらず

深瀬 孤舟

前述のように収容所内では多くの講座が開かれた。主婦は3度の食事の支度から解放され、暇な時間を学習に使うことができた。とくに渡米以来休みなく働いて勉学の機会を待たなかった人びとにとって、それは収容所生活の唯一の利点であった。また、収容所附近には化石があり、化石の採取に夢になる人びともいて、1943年3月には初の展示会も開かれた。

誰ぞ活けしひとと椿紙ながら  
花の命をさながらにせり

岡田 溪水

自然に親しむことをよしとする日本人は、四季おりおりの花を愛でて暮らしてきた。しかし収容所に庭を作り花を植えても、それは短い春夏の間のみで、半年以上は花のない暮らしを余儀なくされた。人びとは紙で造花を作って飾った。所内で生け花展も開かれたが、生け花の技法の習得よりも先に、造花を作ることから始めねばならなかった。



写真2 手作りの家具と造花で和風にしつらえた部屋  
(ハートマウンテン収容所1944年) Mr. Sataro  
Tonai提供

神前に供へむ餅の一つ無し  
心さびしやハート嶺の春

高山 兼則

所内では餅つきも行われたようだが、元旦の給食の雑煮用で手いっぱい、お供え餅などはなかったことであろう。立ち退き前は日本の伝統を守り、神に餅を供えて1年の無事を祈ってきた一世にとっては寂しい正月であった。

心より笑ふことなき我今や  
人笑はさむ舞台に立てり

田中 雷雨

日々の生活の楽しみを奪われた人びとは、自分たちの手でさまざまな催しを行った。日本映画の上映やレコードコンサートは定期的に行われていた。芸能関係では、歌謡曲や舞踊をおりませたショウやレビューから本格的な歌舞伎、少女歌舞伎の公演もあった。この歌の作者も素人ながら舞台に立って、漫才でも演じたのであろう。日頃自分が心から笑うことなどないのに、人を笑わせねばならないという皮肉に、作者の苦しさがにじみ出ている。

センターも年のかはりてつぎつぎに

転住徴兵と事のせはしさ

小池代治郎

1944年1月の歌。出征兵士、外部転住により収容所の人びとの移動があわただしくなり、毎日どこかで送別会や壮行会が開かれていた。

#### ○外部労働

わざ馴れぬをとめ我等が炎天を

這ふが如くに豆もぐあはれ

橋爪富士子

収容所にはいった直後の10月末には、砂糖大根を収穫する農業労働者として1,128名の男女がワイオミング、モンタナ、サウスカロライナ州へ向った。戦争中で労働者が極端に不足していたため、収容所の日系人は労働力として期待された。砂糖大根の収穫を援助することは砂糖の増産につながり、間接的に戦争遂行の努力に貢献するとのWRAの方針により、このような外部労働は継続して行われた。収容者にとっては収入が得られること、短期間でも柵の外へ出られることが魅力であった。収容所の記録から推測するとこの歌の作者は、7月半ごろにユタ州へ向ったのではないと思われる。若い婦米二世の橋爪は両親を残して働きに出かけた。WRAは彼らをバスに乗せて目的地ウィラードまで運んだ。しかし連絡が悪く、仕事場の缶詰工場で働くことができずに、豆をもぎに行くことになったという。報酬は出来高払いで1束摘んで2セント、50束ほどを籠にいれて決められた場所へ運ぶ。朝の5時から夕暮までの重労働であった。

#### ○子供

鐵柵のなかに生ひゆくわが子等を  
導くすべに悩みわづらふ

高山 兼則

ハート嶺に求めし西瓜珍重しみて

食ふさまあはれ吾が幼子ら

高山 兼則

一般社会とはまったく異なった状況のなかで子供を育てねばならない人びとの悩みは深刻であった。子連れで短期間外部に出た人がレストランにはいると、子が「タディ、このメスホール（収容所の食堂）はきれいだね」と言ったというエピソードもある。普通の生活をしていれば西瓜など簡単に手にはいるが、収容所ではキャンティーン（所内の売店）に入荷したのを行列で買わねばならない。1年中食堂で食べていると母の手料理の味も知らず、しつけもできないと親たちは心を痛めていた。

あわただしく荷造終へて吾娘立ちし

後の寂けさ室ひろびろと

岡田 文枝

漢字には假名を附けたるちははの

文讀む吾娘が面影偲はゆ

富田ゆかり

合衆国に忠誠であると認められた人びとは、WRAの許可を得て外部へと転住していった。まず英語に不自由のない若者が、就学や就労の目的で出所した。親である一世は、生活した経験のない東部や中西部へ出るのをためらって収容所に取り残された。子の将来を思えば出した方がよいが、転住先での苦勞を考えると親の心は不安で揺れ動いた。この2首は娘を外部に送った母の歌である。英語が不得手な一世と日本語の読めない二世の間の意志の疎通は難しく、お互いにこみいった話を理解することは無理であった。両親は親の気持ちを伝えようと、娘に仮名付きの手紙を送ったのであろう。

#### ○自然

道のべの踏まれし花も踏まれたる

ままにかそけく實をつけにけり

橋爪富士子

逆境にある婦米二世の作者の目は、大輪の花壇の花ではなく、道のほとりの名もない草に注がれている。その草



が踏まれてもなお、ひっそりと実を付けているのを見て  
自分の立場を思いやる。外部で暮らしていたときは、そ  
のような小さいものが目にとまることはほとんどなかっ  
たであろう。しかし自由が制限されている状況下では、  
普段なら気づかないで見過ごしてしまうようなものさえ、  
いとおしく思われるのである。

風と共にいづくにか去るころころと  
行方も分かれぬタンブリングウィード 小穴 みん

タンブリングウィード (tumbling weed) は、収容  
所の周辺の草原に生えるヒユ、アカザなどの植物が秋に  
なって枯れたのち根元から折れて、風に吹かれ球状になっ  
たものをいう。作者はあてもなく草原をころがっていく  
回転草に、強制立ち退き以来、ふたつの収容所を移動し、  
再び外部へ転住する自分の身の上を見ている。

#### ○日系人戦闘部隊

ますらは雄々しかれとぞ召されゆく  
友の子送る言葉強めて 深瀬 孤舟

入營の日は遂に来ぬ二世等は  
歸る日知らぬ門出せむとす 能勢 昇

1943年1月30日付『ハートマウンテン・センチネル』  
紙の論説は“Stimson Opens Army to Nisei”の見  
出しで、合衆国政府が日系人の志願兵募集にふみきった  
ことを伝える記事を載せている。“The War Depart-  
ment's decision to induct Americans of Japa-  
nese descent into the U.S. Army on a volunteer  
basis is an epic milestone in the long uphill  
battle to re-establish our positions as Ameri-  
cans.

Many who have sought to bear arms in de-  
fense of this nation now have that opportunity.”  
日系人は従軍することで合衆国に忠誠を示す機会が与え  
られたと歓迎する論調であるが、一世の親たちにしてみ  
ればその気持は複雑であった。

いつの世でも喜んで子を戦場へ送り出す親はいない。  
まして一世の心には、息子の生命についての不安と同時  
に故国日本と戦うという苦い思いが混じり合っていた。

この作者は傍観者であるが、息子を送る友の気持や出征  
する二世の気持を思っている。

千人針乞ふ親心思ふとき  
噓はれぬかも迷信とのみ 金沢登志男

この歌を読むと、これがアメリカで詠まれたものか日  
本なのか判断できないであろう。しかし、日本国内と同  
様に収容所内でも、兵士を送る親たちは日本の伝統にし  
たがって、道行く人に「千人針」を頼んだという。息子  
の無事を祈る親の心は所が変わっても同じである。

#### ○二世ヒーロー

ツニシアの空のヒーロー黒木氏の  
面輪しづけし笑みさへ浮かべて 神前亀太郎

ベン・クロキはネブラスカ州ハーシー生れの25才の二  
世軍曹で、空軍の戦闘での勇敢な行動によりふたつの殊  
勲十字章 (Distinguished Service Cross) を贈られ、  
英雄となった。彼は1944年4月末に収容所の住民組織の  
招待で講演のため来訪した。歓迎式典には所長以下  
3,000名の住民が参加した。彼の来訪は、5月から開始  
される徴兵を円滑にするための監理者側の政策の一環と  
考えられる。

#### ○戦死

来りつぐ戦死の悲報センターの  
ゆゆしき時に今ぞ真向ふ 内田 静

軍服の君がうつしゑ香煙の  
なかに笑ますも生けるが如く 堀内和歌子

1944年2月になると日系兵士の戦死者の記事が新聞に  
載るようになり、7月4日イタリ-戦線においてハート  
マウンテン出身兵士のなかから初の戦死者が出た。5月  
からは徴兵も始まって、若者たちは次つぎと訓練のため  
に各地の基地へ向かった。同時に、最愛の肉親を失った  
不幸な家族が増えていった。

元氣よく別れし汝の姿なほ

散華の今もありありと見ゆ

棚橋 宗二

慰問の醤油の瓶とり出でて

富田ゆかり

作者の棚橋は一世で、収容前はロサンジェルスでランドリーを経営しており、多くの優れた歌を残している。収容所内に孫もいた様子であるが、次男は徴兵により合衆国軍の中尉となったが、両親と妻を残して戦死した。『ハートマウンテン文芸』9月号には「征きて還らず」と題し、息子を失った悲しみをうたった10首がおさめられている。

○日本への想い

サイパンに兵民ともに幾万の  
死屍を重ねて遂に空しき

能勢 昇

隣室のサイパン戦のラヂオニュース  
聞きてタイプライター打ち誤りぬ

松本 壽郎

マーシャルの激しきいくさの映画をば  
見ます老人顔あげ給はず

内田 君子

曇りくる心いかにせむ邦字紙<sup>(20)</sup>の  
戦況ニュースけふも読みつつ

富田ゆかり

硫黄島のいくさ話に移りゆき  
一座の空気とみに沈みぬ

岡田 溪水

『ハートマウンテン文芸』が刊行されたのは、合衆国に不忠誠な人びとがトゥーリレイク隔離収容所へ去った後であるから、これらの短歌の作者はすべて忠誠組であった。しかし、日本人である一世および日本で教育を受けた婦米二世の心の奥深いところには、日本への想いが秘められていたにちがいない。たとえ合衆国に忠誠を表明していても、ひそかに日本の勝利を願う人もいたという。また、日本の勝利にあまり関心を抱かなかった人でさえ、血のつながった日本人の惨憺たる敗北を見て暗い気持ちになったことであろう。当時の日系人の複雑な心境が伝わる歌である。

○日本からの慰問品

いくたびか香をなつかしむ遠く来し

赤十字のマークつきたる茶包を  
開けばその香身に沁みわたる

細澤 俊女

国際赤十字を通じて全収容所に日本からの慰問品が届いた。味噌、醤油、緑茶、書籍などであったが、一世や婦米二世たちにとって醤油は単なる調味料ではなく、それ以上の大きな意味をもっていた。アメリカにいてもそれらを容易に手にいれることができるのだが、日本から贈られたことに意味があり、それらの品じなは彼らが今、手の届かない懐かしい日本そのものであった。日本に行ったことのない純二世には理解できない気持であろう。作者はいずれも一世である。

○望郷

汝を待つと戦時ひとことの文ながら  
まさしき父のみ聲を覺ゆ

小池代治郎

交戦中の日米間の通信は赤十字により中立国経由で届けられた。通信の字数も内容も制限されていたが、相互の無事を知るだけでも安堵したことであろう。

○日本への帰国

ハート嶺に照る月にかも我や今  
グリップスホルムの甲板に仰ぐ

松本吉太郎

作者は第2次交換船<sup>(21)</sup>により日本へ帰国した。この歌は1943年12月6日に、交換地インドのマルマゴンからハートマウンテン収容所に送られて来た歌便りのなかの一首である。

○再定住

けふぞ我シカゴのまちの土を踏む  
五州越え来し旅つつがなく

小池代治郎

人びとが収容所に送られた1942年の12月、WRAは方針を転換し、忠誠であると認めた人を外部へ転住させる計画をたてた。まず、シカゴに現地事務所を開設して職

業幹施および住居の世話などをするようになった。人びとはおもにシカゴ、ソートレイクシティ、ニューヨークなどに新たな生活の場を求めて収容所を去って行った。

軍の許可待ち佗びにつつふるさとの

羅府に歸らむ明け暮れせはし 丸勢はま子

加州帰還の思いぞ曇るしばしばも

不穩のニュースいたるを聞けば 船越 茂吉

1945年になると禁止されていた西部沿岸への帰還が許可されて、人びとは願いがかなって住み慣れた住いへ帰れるようになった。待ちに待った帰還であった。しかし、フレズノなどでは日系人の帰還を喜ばない者が発砲するなどの事件も起こった。不安にかられて収容所を出るのをためらう気持ちが率直にうたわれている。

## 6. おわりに

筆者はこれまでにボストン、トゥーリレイクそしてこのハートマウンテン収容所内の文学活動について調査してきた。これらの収容所を比較してみると、ハートマウンテン収容所の文学活動は、短詩形文学中心であった。この収容所においておもな文学活動が行われたのは、不忠誠者たちがトゥーリレイク隔離収容所に去ったのちであったから、文芸誌はすべて合衆国に忠誠な人びとによって作られていた。『ハートマウンテン文芸』の原稿募集広告には、政治的な事柄を扱った作品は除く旨が明記されている。当事者は当局から検閲で排除される前に、自己規制を行なって政治的な作品を除こうと心がけていたのである。したがって親日的思想を明らかにしたり、合衆国の日系人に対する政策を批判した作品は見られない。

しかし、合衆国に忠誠を表明した人びとでも日本への思いが断ち切れなかったことを、短詩形文学が如実に示している。日本人は古来、短歌や俳句のごく短い字句のなかに複雑な内容をこめて表現してきた。収容所の短詩形文学も同様に人びとの心情の吐露であり、このなかに真実を読み取ることができる。日本から贈られた慰問品の醤油は単なる調味料ではなく、日本そのものであり、隣室のラジオが日本軍の敗北を伝えれば、思わず聞き入ってタイプを打ち誤ってしまうという人びとの本音が、歌のなかから聞こえてくるのである。

ハートマウンテン収容所の短詩形文学活動は、戦後も

続き、高柳沙水は北米短歌会を主宰して、『羅府新報』の歌壇の選者となり、日系人に短歌を指導した。また、ハートマウンテンで高柳に師事した『北米短歌』同人服部尚之<sup>(22)</sup>は、高柳亡き後、1968年にロサンジェルスでロッキー短歌会を作り、作歌指導を続け『黎明』（1970年）、『ロッキー山系』（1974年）などの歌集を出版した。『ハートマウンテン文芸』同人であった常石芝青は、日本のホトトギス句会に属し、『羅府新報』の俳壇を担当して1974年に『北米俳句集』を編集し、北米の俳壇の指導的立場に立った。日系アメリカ文学の歴史のなかで、短詩形文学は趣味的な色彩の強いものとして、とかく見過ごされがちであるが、その時々の日系人の真実の心情が表されているところから、もっと重要視されるべきであろう。

## 謝 辞

この小論の資料収集にあたって、次の方々にご協力をいただきました。ここにお名前を記し感謝いたします。岡 省 三 様 (Japanese American History Archives)、服部尚之様 (ロッキー短歌会)、加屋良晴様 (南加文芸) Mr.Sataro Tonai, Mr.Katsuya Amasuga.

## 註

- (1) 1899年カリフォルニア州オークランド生れ。ロサンジェルスオーティス美術学校に学ぶ。1928年、日系二世のアーサー・イシゴと結婚。1957年夫と死別。1990年ハリウッドの病院で孤独のうちに死去。
- (2) 「日系アメリカ文学—強制収容所内の文学活動」
  - ① ボストン収容所 『東京家政大学紀要』27集、1987年、pp.33-41.
  - ② トゥーリレイク隔離収容所 『東京家政大学紀要』29集、1989年、pp.11-21.
- (4) Estelle Ishigo, *Lone Heart Mountain*. (Los Angeles, Japanese American National Museum, 1972.) pp.19-20.
- (5) 『ハートマウンテン・センチネル』紙。1942年10月31日付の記事によれば、同年10月21日に調査では、住民の収容前の職業は次の通りであった。農業家(684名)、農場労働者(497名)、家庭労働者(407名)、果菜卸小売業(400名)、庭師(332名)、料理人(14

- 7名), 食料品店(95名), ドレスメーカー(81名)。
- (6) 在米日本人会編『在米日本人史』第2巻 (復刻版 東京, PMC出版, 1984年) p.590
- (7) *The Denver Post*, 4/3/43.
- (8) WRA, *The Relocation Program—A Guide-book for the Residents of Relocation Centers*. (Washington) DC., WRA, 1943) p.10.
- (9) Bill Hosokawaは1916年シアトル生れの二世。ワシントン大学ジャーナリズム学科出身。1946年から『デンヴァー・ポスト』紙に入社。編集局次長, 論説委員長を歴任。 *The Nisei, East to America*, *JACL: In Quest of Justice*など日系人史に関する多数の著書がある。
- (10) 『ハートマウンテン・センチネル』紙1944年2月12日付
- (11) 1889年スロヴェニア共和国カニルオーラ生れ。1913年にアメリカへ渡り, 陸軍に志願したのち市民権を得る。1925年に最初の小説を出版。1934年に *The Native's Return* でユーゴ系アメリカ人作家としての地位を確立した。
- (12) 『ハートマウンテン・センチネル』紙1944年2月12日付
- (13) *The Heart Mountain Sentinel*, 10/24/42.
- (14) シアトル在住の一世。白人家庭の使用人として働いた。かわら短歌に親しみ, 戦前に『加州毎日』新聞歌壇の選者をつとめた。妻の死後1970年始めに日本へ帰って死去。
- (15) 本名黒川薫, 1882年熊本県生れの一世。戦前はワシントン州ヤキマに住む。1944年2月収容所で死去。
- (16) 『ハートマウンテン・センチネル』紙1944年1月13日付
- (17) 1824年, カナダのフォートジョージ生れ。1848年, 漂流を装って利尻島に上陸。長崎に送られて7カ月の監禁生活を送る間, 日本初の英語教師となり, 幕府の通詞・森山栄之助らに英語を教えた。
- (18) 『北米短歌』10号(高柳沙水編, ハートマウンテン収容所, 1944年) p.46.
- (19) たなはし・そうじ, ロサンジェルスでランドリーを経営していた一世。戦争で次男を失う。
- (20) 『ユタ日報』をさす。1914年創刊のソルトレイクシティの日系コミュニティ紙。戦争中も継続して発行されていた。
- (21) 交換船については, 篠田左多江, 「下妻孝悌: 第2次日米交換船帝亜丸船中日記について」, 『移住研究』No.22, (国際協力事業団, 1985年) pp.50-64参照。
- (22) 1906年愛知県海部郡出身。11歳のとき親の呼び寄せでロサンジェルスへ。ハリウッドで生花商を営む。戦前から高柳沙水に師事して短歌を学ぶ。戦後は庭師として働きながら, 短歌会を主宰。